

病理科後期臨床研修プログラム

当科の概要

主任部長・大阪大学医学部臨床教授 伏見 博彰

当科は、病理医 6 名(常勤 2 名、非常勤 4 名)、臨床検査技師 10 名(常勤 7 名、非常勤 3 名)で運営されており、組織診・細胞診・病理解剖業務を担当しています。年間、組織診 9,561 件、細胞診 8,410 件、術中迅速診断 372 件、病理解剖 33 件(2016 年実績)を取り扱っています。正確な診断を心がけ、組織診はほとんどの症例について医師によるダブルチェックを行っており、細胞診においても 7 名の細胞検査士によるダブルスクリーニングを心がけています。これに加えてスクリーニング陰性例についても全例を専門医が確認し、サインをしています。病理解剖症例に関しては、ほぼ全例について臨床病理カンファレンス(CPC)を開催し、病理医・臨床医ともに個々の症例から多くのことがらを学んでいます。

当センターは大阪府の基幹病院であり、全分野にわたる豊富な症例を経験することが可能です。また、大阪でも上位に入るがん患者数を取り扱う施設であると同時に全国で 26 ヶ所のみ認定されている高度救命救急センターを有しています。このため当科に提出される検体は腫瘍性病変のみに偏らず人体のあらゆる部位から多岐にわたっています。具体的には各種良性・悪性新生物、腫瘍様病変、炎症性皮膚疾患、非腫瘍性肺疾患、膠原病、循環器疾患(心筋疾患、心弁膜症、動脈瘤等)、腎疾患(糸球体腎炎、移植腎の拒絶反応)などです。悪性腫瘍は早期癌から進行癌まで偏りはありません。皮膚科や腎臓・高血圧内科の検体も当科で診断を行っています。また、提出された多くの手術検体の固定・貼り付け・切り出し・診断作業を病理医が行っています。病理解剖に関しては、死因や病態に関して毎回CPCで熱心に議論されており、それぞれの症例に対して正確な最終診断を行うために納得がいくまで検討しています。追加切り出し、特殊染色、免疫染色(抗体は 100 種類以上を所有しています)、蛍光顕微鏡や電子顕微鏡による評価を行う環境も用意されています。

特 徴

1. 初歩からの病理研修

現在の初期臨床研修制度では、多数の科をローテートすることが義務付けられており、病理科での研修可能な期間は限定的にとどまっています。また、病理科をローテートせずに初期臨床研修を終了した後に、病理医になることを志す人もいることが予想されます。したがって、当科における初期臨床研修終了後の専門研修は病理の初歩から始める事を前提としており、病理診断未経験者も専門研修可能です。

2. 研修の目標および研修内容

病理医としての基本的な技能を身につけることを目標とします。具体的には卒後6年目から受験可能な日本病理学会専門医、日本臨床細胞学会細胞診専門医試験に合格できることを目指します。基本的な研修内容は日本病理学会の定めた病理専門医研修カリキュラム (<http://pathology.or.jp/gakuken/curriculum.html>)に沿って行います。

以下に、その概略を記載します。

1) 病理診断の基礎：目的をよく理解し、正確な病理診断を行うことができる。

- ① 依頼内容をよく理解し、目的を正確に把握できる。
- ② 摘出された臓器の写真撮影を適切に行える。
- ③ 固定(固定液の種類・量・時間)についての正確な知識を有する。
- ④ 標本の肉眼的観察を十分に行い、適切な切り出しをすることができる。
- ⑤ 顕微鏡標本の作製過程を理解することができる。
- ⑥ 正確な診断に至るために必要な染色を選択できる。
- ⑦ 生物顕微鏡の操作と標本観察を正確に行うことができる。
- ⑧ 組織学的所見を正確にとり、適切な報告を作成することができる。
- ⑨ 必要最低限の電子顕微鏡所見をとることができる。
- ⑩ 細胞診断の重要性と意義を理解し、細胞診標本を観察する機会を持つ。
- ⑪ 主治医と円滑に討論を行うことができる。

2) 生検材料の病理組織診断：様々な生検材料に対して正確な病理診断を行うことができる。

- ① 臓器ごとの生検方法を理解する。
- ② 頻度の高い生検材料(消化管等)の標準的な診断ができる。
- ③ 子宮頸部・体部、乳腺の生検の標準的な診断ができる。
- ④ 皮膚生検の標準的な診断ができる。
- ⑤ 肝生検・気管支生検の標準的な診断ができる。

- ⑥ 泌尿器系生検の標準的な診断ができる。
- ⑦ 腎生検は特殊染色・蛍光抗体法の所見を加味して標準的な診断ができる。
- ⑧ 術中迅速診断に参加する。

3) **手術材料の病理組織診断**：様々な手術材料に対して正確な病理診断を行うことができる。

- ① 摘出標本（新鮮、固定後とも）の肉眼的観察を行い、病変を正確に把握することができる。
- ② 正確な病理診断を行うために必要かつ十分な切り出しを行うことができる。
- ③ 癌に関しては、各臓器の「癌取扱い規約」に基づいて切り出しを行うことができる。
- ④ 各臓器の「癌取扱い規約」に基づいて標準的な病理診断を行うことができる。
- ⑤ 癌以外の摘出標本に関しても標準的な病理診断を行うことができる。
- ⑥ 正確な診断に至るために必要な特殊染色・免疫染色を選択することができる。

4) **病理解剖**：病理解剖の意義をよく理解し、解剖の手技を会得し、病理診断を行うことができる。

- ① 死体解剖保存法の規定を理解し、解剖前の諸手続きを知る。
- ② 主治医から臨床事項の説明を受け、疑問点を適切に把握する。
- ③ 病理解剖の基本的手技を会得する。
- ④ 各臓器を肉眼的に観察し、主治医に病態を説明することができる。
- ⑤ 固定後に各臓器から適切に切り出しを行うことができる。
- ⑥ 肉眼所見と組織学的所見および臨床的事項を総合し、論理的な病理解剖報告書を完成することができる。

3. 研修環境

当科は他施設の病理部門と比べるとはるかに広いスペースが確保されているため、スペースの制約をあまり受けずに資料を広げて診断業務に当たることが出来ます。ブロックやプレパラートも半永久的に保管されており、いつでも利用可能です。環境面に対する配慮も行き届いており、特にホルマリン対策や感染対策はほぼ完璧になされています。

当然ながら病理部門として必要な学会認定は全て取得しており、日本病理学会認定施設、日本臨床細胞学会認定施設・教育研修施設となっています。

また、病院機能評価においても、取得困難である最高ランクのS評価を受けています。

このような環境のもと懇切丁寧に指導するので、病理医を目指す方々には充実して満足できる研修が行える最高の研修環境にあります。

4. 大学との連携

当科は大阪大学大学院医学系研究科病態病理学教室・大阪大学医学部附属病院病理部および兵庫医科大学医学部附属病院病理部の研修連携施設となっています。したがって、上記施設の専門研修プログラムに則って研修を行います。

- ・大阪大学病理専門研修プログラム

http://pathology.or.jp/senmoni/27_04_505oosakadai2018.pdf

- ・兵庫医科大学病院・病理専門研修プログラム

http://pathology.or.jp/senmoni/28_03_511hyogoidai2018.pdf

5. 専門研修終了後の進路

専門研修終了後の進路に関しては、当センターや他の医療機関への赴任や大学院進学等の相談、紹介が可能です。是非ご応募・ご連絡ください。

以上の点から、当施設は病理医としての基本的な知識・経験を得るための初期トレーニングを行うのに最適な環境にあります。

業績・実績(2016年)

1. 病理組織診断材料別検査件数

材料名	件数	迅速件数
循環器系	205	2
呼吸器系	553	67
消化器系	4,500	55
内分泌器系	116	21
泌尿器系	507	10
男性生殖器系	392	1
女性生殖器系	1,342	41
造血臓器系	169	31
神経系	63	41
運動器系	316	2
感覚器系	51	0
外皮系 (含乳腺)	917	90
その他	58	11
小計	9,189	372
合計	9,561	

2. 細胞診断材料別件数

材料名	件数	陽性率 (%)	疑陽性率 (%)
婦人科	3,307	1.57	12.25
呼吸器系	1,030	24.85	6.80
泌尿器系	2,089	8.38	9.10
消化器系	226	28.96	22.57
体腔液	529	24.20	4.73
甲状腺	439	12.76	9.57
頭頸部	229	4.37	13.54
乳腺	215	34.42	10.23
リンパ節	208	34.13	5.77
その他	138	5.80	3.62
合計	8,410	10.64	10.14

|| 見学等問合せ先 ||

伏見 博彰 : fushimihi@opho.jp